

2003年夏 アフリカ・ヨーロッパ研修旅行報告

岩垂雅子

本稿は、筆者が2003年夏に学校法人学習院より旅費の一部助成をうけて参加した(株)帝国書院主催の「ジブラルタル海峡を渡って初めてわかるアフリカとヨーロッパ地理研修旅行」の報告、および研修によって得られた知見についてフィールドノートをもとに記録したものである。

<研修の目的>

イスラムとヨーロッパの接点である地中海世界の文化景観、および地中海性気候と深く結びついた生活や産業への見識を深める。

<行程>

- 7月29日(火) 日本発 パリ経由で深夜 カサブランカ着（カサブランカ泊）
 30日(水) 午前 カサブランカ港湾施設および市内見学
 午後 首都ラバトへ移動 ラバトの旧市街地を散策 モハメド5世廟見学
 夜 市内の高校に勤めるフランス語教諭と会食（ラバト泊）
 31日(木) 午前 ラバトの日本大使館にてモロッコの社会経済について説明を受ける
 午後 メクネス旧市街地およびメクネス郊外のワイン工場見学
 フェズへ移動（フェズ泊）



図1 研修旅行の主なルート

- 8月1日(金) 終日 フェズの旧市街地および新市街地を散策（フェズ泊）
 2日(土) 午前 北端の港町タンジールへ移動
 午後 フェリーでジブラルタル海峡を渡りスペインのアルヘシラス港を経由してイギリス直轄領ジブラルタルへ移動（ジブラルタル泊）
 3日(日) 午前 ジブラルタル市内見学
 午後 スペイン南部カディスのシェリー酒工場見学（ウェルバ泊）
 4日(月) 午前 ポルトガル南部の世界遺産エヴォラ市見学
 午後 リスボン近郊のコルク製造工場見学（リスボン泊）
 5日(火) 午前 リスボン市内見学
 午後 ポルトガル西岸のロカ岬および世界遺産シントラ市見学（リスボン泊）
 6日(水) 午前 リスボン市内散策 昼過ぎ帰国の途につく
 7日(木) 日本着

モロッコ王国

<地理>

総面積：459,000 km²（西サハラを除く¹）

地勢：アフリカ大陸北西部（北緯34° 西経6°）に位置し、東隣のアルジェリア、チュニジアと共に「マグレブ諸国」を構成する²。北はジブラルタル海峡を挟んでヨーロッパ大陸に至る。スペイン南部のアルヘシラスから高速船で1時間、距離にして僅か14 kmという位置にあり、まさにヨーロッパからアフリカへの玄関口となっている。西は大西洋、東はアルジェリア、南は西サハラを挟んでモーリタニアと接している（図2）。

ユーラシアプレートとアフリカプレートが接する新期造山帯に属し、3000~4000 m級のアトラス山脈が東西に横たわる。アトラス山脈以北は小麦、オリーブ、ブドウ、柑橘類などが栽培される肥沃な平野地帯が広がる。アトラス山脈以南ではオアシス集落が点在する半砂漠・砂漠の広がる乾燥地帯となっている（写真1）。



図2 アフリカ大陸北西部



写真1 アトラス山脈とオアシス集落

気候：地中海・大西洋沿岸から内陸の高原にかけては温暖な地中海性気候、山岳地帯は冷涼な山岳気候、アトラス山脈以南は暑さの厳しい乾燥（砂漠）気候が分布している。

首都：ラバト（人口約170万人）経済の中心地カサブランカは280万人。

政治体制：モハメド6世を元首とする立憲君主制

人口：約2870万人

人種・民族：ベルベル人、アラブ人、ユダヤ系、ヨーロッパ系、黒人など

宗教：イスラム教（逊ニ派）、キリスト教、ユダヤ教

言語：公用語はアラビア語であるが、歴史的経緯からフランス語やスペイン語も普及している。

産業：農業、漁業、鉱業（燐鉱石）、織維加工業、観光、海外での出稼ぎ労働者からの送金³

<略史>

古代（紀元前3000年ごろ）：先住民族ベルベル人が部族単位で生活していた。

11 B.C.～A.D. 7：地中海東岸・北岸からフェニキア人、ギリシャ・ローマ人等の異民族が侵入した。

A.D. 7：東方よりアラブ人が進入し、イスラム教が伝播される。

A.D. 16：地中海・大西洋沿岸各地にスペインやポルトガルの領地が建設される。

1912年：フランスの保護下におかれる。

1956年：モハメド5世がフランスから主権の回復を果たし立憲君主制が成立する。

<モロッコの都市景観>

モロッコの都市の多くは、旧市街地（メディナ）と19世紀のフランスの保護領時代に築かれた新市街地によって構成される。街路のいたるところに袋小路が配されている迷路のようなメディナと、整然とした都市計画が施されている新市街地はきわめて対照的である（図3）。

多くの都市ではメディナに隣接した地域にユダヤ人街（メラー）⁴が築かれ、旧市街地の外

³西サハラはモロッコとモーリタニアに挟まれ大西洋に面した地域で、面積は約265,000 km² の地域、長らくスペインの保護領下にあり、スペインの撤退後すでに20年以上にもわたりアルジェリアの支援を受ける住民組織との間でモロッコへの帰属か独立かで論争が続いている。

⁴「マグレブ」とはアラビア語で「陽の沈む地」を意味する。

⁵主な出稼ぎ先はEU加盟諸国で、とりわけスペイン、ポルトガル、イタリア、フランスなど地中海沿岸諸国を中心、首都カサブランカにはEUの出先機関が置かれており、出稼ぎ先の就労ビザの発給事務を一括して行っている。

⁶中世以来スペインで迫害され、モロッコに移住してきたユダヤ人が集住したことで形成された。第二次大戦後のイスラエル建国に伴い多くのユダヤ人が流出したため、今日では住民の大半がムスリムにとって代わった。メラー内にはシナゴーグが配置され、住居の外観には木製のバルコニーや格子窓といったユダヤ特有の様式が色濃く残っている。



図3 旧市街地（メディナ）と新市街地
(左：メクネス 右：ラバト) Ehlers (1984) より

縁部には墓地が配置されている。メディナは7世紀に進入してきたアラブ人によって築かれた街区で、高い城壁によって囲まれ、城壁には幾何学的なモザイク模様で彩られた複数の門が配置されている（写真2）。

メディナの内部は人や荷役のロバがやっとすれ違えるほど狭い路地が迷路のように張り巡らされており（写真3），その脇に市場（スーク）や商店，住宅，礼拝所（モスク），宗教学校（マドラサ），地場産業の工場や工房などが隙間なく配置されている。

メディナを歩いていると、狭い街路を行き交う人やロバの足音、人々のざわめき、日用品を売る売り子の声と相まって、真鍮の皿や鍋釜などをつくる工房からは石や金属板を金槌で叩く甲高い音、街路の脇に入り口があるモスクからは独特の旋律で祈祷を呼びかける声（アザーン）が響く。また、道路端で売られる山積みされたミント（写真4）の爽やかな香り、砂ぼこり、そしてフェズの地場産業である皮革工場（写真5）からは鼻をつくような異臭など、実に混沌とした匂いがする。

<農村景観>

平野部：オリーブ、コルク櫻、柑橘類、ブドウ（写真6）、小麦など地中海性気候に適した耐乾性の作物を栽培する広大な農地が広がる。近くを流れる河川の周辺では点滴栽培や用水路灌漑に加えて、いわゆる「センターピボット」と呼ばれる散水の自動制御装置がついた先進的技術が導入されていた。海岸付近や海に近い河岸では天日塩田（写真7）も散見した。

山岳地帯：山岳民族が急峻な傾斜地に石材で家を建て、ラクダやヤギ、羊などの家畜の放牧を営む。

内陸の乾燥地域：主要な街道沿いには部族の要塞（カスバ）が点在し、河川の沿岸や湧水



写真2 フェズ旧市街地の入り口
(ブー・ジュルード門)

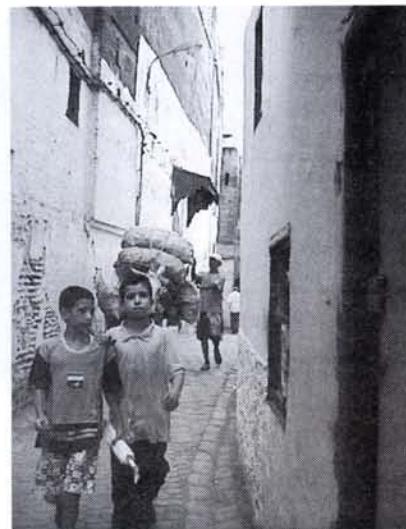


写真3 フェズ旧市街地の内部（1）



写真3 フェズ旧市街地の内部（2）



写真3 フェズ旧市街地の内部（3）

帶のオアシス集落ではナツメヤシや小麦の栽培、家畜の放牧など自給的農業を営む。

<一般家庭の見学>

フェズのメディナ見学の後、旧ユダヤ人街（メラー）の一角に住むモロッコ人の一般家庭を見学する機会を得た。住居は伝統的な石造りの集合住宅の3階にあり、床には石のタイルが敷き詰められ、漆喰で塗られた壁に小さい窓が2つずつ配置されている伝統的な家屋



写真4 市場（スク）で売られるミント（左）やナツメヤシの実（右）



写真5 皮なめし工場での作業風景



写真6 メクネス近郊のブドウ畠



写真7 天日塩田の様子

である。玄関を入って正面にある食堂と居間を兼ねた部屋の両脇に客間と寝室（それぞれ10畳ほど）があり、客間には壁に沿って細長いソファが一巡しているため、来客20人余りが楽に入れる部屋のつくりとなっていた。客間に通されると、間もなくお茶の用意が始まった（写真8）。モロッコでは一般的にミントティーが愛飲されている。ミントティーは茶器一杯に詰め込んだミントの葉の上から熱い中国茶を注ぎ、砂糖をたっぷりと入れる飲み物。あまりにも甘味が強いため、モロッコを訪れた最初のうちは筆者も含めて砂糖を入れずに飲む人が多かったが、次第にモロッコの盛夏の気候に慣れてくるとミントティーの糖分が暑熱からくる疲労を緩和するということがわかり、最後のほうではモロッコ人と同じ甘さのミントティーを飲むようになっていた。

＜モロッコの地理学者アル・イドリーシーの地図＞

モロッコ旅行の報告の最後に、モロッコの地理学者アル・イドリーシーの地図に関して今回の研修旅行の取材で得られた知見を紹介しよう。

筆者は以前から高校1年の地理の単元「世界観の発達史」の中で、12世紀のイスラム世界の世界地図としてイドリーシーの地図を取り上げることにしている。図4にみるように、この地図の上半分には勾玉のような形の大陸が広がり、左下にはやや小ぶりの陸塊が描かれている。勾玉型の大陸は全体的にのっぺりと大雑把に描かれているのに対して、小ぶりの陸塊の方には線状に表された山脈や河川が細々と書き入れてあり、内海や内陸湖、主だった半島が記されている。

この、2つの陸塊の描かれ方の違いは、当時の地理的知識の度合いが大きく異なることを表している。バビロニアの地図やプトレマイオスの地図にみるように、古来より人が世界像を表す際には、書き手が詳しく知っている土地については細かに描写するが、知らない土地については想像力を駆使して大雑把に表すという手法が用いられてきた。このイドリーシーの地図にも同じことがいえる。小ぶりな陸塊については半島の形や山脈・河川の位置



写真8 一般家庭におけるお茶の用意



図4 アル・イドリーシーの地図（12世紀）

など地理的知識はかなりの程度発達しているのに対して、大陸に関しては殆どの部分が未知であるため大雑把にしか描かれていません。

この地図を真方位、すなわち北の方位を上に置く（ノースアップ）という今日の常識を用いてみれば、上半分に描かれている大陸がユーラシア大陸、左下の陸塊がアフリカ大陸と考えられる。では、12世紀当時のイスラム世界の科学者の間では、ユーラシア大陸の知識よりもアフリカ大陸の地理的知識の方が勝っていたのだろうか。いや、そうではない。イドリーシーはアリストテレスの地球球体説やエラトステネスの地球の全周測定、地中海周辺や黒海・カスピ海、インド半島やスカンジナビア半島の地理的知識を地図に表したプトレマイオスの世界図など、ギリシャ・ローマ時代の科学者たちの地理的知識をふまえた上で、自らが依拠する「イスラム教の世界観」、すなわち、北の方位を下に置くというイスラム世界の常識を用いてこの地図を描いたのである。つまり、この地図は通常の地図とは異なり南北の向きが逆さまに描かれているのである。したがって当然のことながら地図の右は西、左が東となっている。なるほど、地図を上下逆さまにして見るとよくわかる。北半球にある小ぶりな陸塊、すなわちユーラシア大陸はプトレマイオスの地図を模したく北端にスカンジナビア半島、西端にイベリア半島が、図の中央にアラビア半島、そして内陸部には黒海とカスピ海が描かれていることがわかる。それに対して南半球の勾玉型の大陸には、地中海に注ぐナイル川⁵とアトラス山脈の位置がほぼ正確に表されていることを除けば随分と大雑把に描かれている。

では、なぜイドリーシーは南北を逆さまに描いたのだろうか。そこで研修旅行に随行していたモロッコ人の案内人に聞いてみた。彼の説明によれば、アラビア語で「北」を表す言葉が「左」を表す言葉と同一であり、イスラム教では「左」は忌み嫌われる言葉であるこ

⁵ナイル川の内陸にある巨大な銀の山の水源から流れ出していると考えられていた。

とから、北を上にして地図を表すことを避けたということである。ではなぜイスラム教では「左」を忌み嫌うのだろうか。イスラム教の経典コーランによれば、人間は生前、自分の左右両側に一人ずつ天使がついており、その人が生前に行った善行を右の天使が、悪行を左の天使が詳細に記録している。その人が死ぬと二人の天使は神アッラーに記録帳を提出し、それらの記録をもとにアッラーが天国行きか地界行きかを判定する。善行が悪行に勝ればめでたく天国行きだが、悪行が善行を凌ぐ場合にはアッラーから左手で悪行記録帳を手渡され地界行きの宣告を受ける。このことから、イスラム世界では「左」が忌避されるということである。

この地図で勾玉型のアフリカ大陸が東方（この地図では左方）にせり出している部分は、プトレマイオスの地図以来長いあいだ科学者や冒険家たちがその存在を信じ続けた“未知の南方大陸（*Terra Australis Incognita*）”を表している。科学者や冒険家のロマンスをかきたてたこの幻の南方大陸は、太平洋を航行中に数々の島や大陸を白人として初めて発見したタスマンやクックらによって17世紀以降相次いで解説が進められた。かつて、古代の世界図で東方にせり出したアフリカ大陸の形状は修正され、南極大陸とは別の大陸としてクックによって「発見」された新大陸が、幻の南方大陸の呼称である“*Terra Australis*”から「オーストラリア」と名づけられたことは周知の事実である。そのオーストラリアでは、天地すなわち南北が逆さまに描かれている地図が広く出回っていて、格好のオーストラリア土産として人気が高い。これは、オーストラリア人によるアルタナティブな世界観の提示とか、オーストラリア人のアイデンティティの誇示であるとか、あるいは地図のグローバルスタンダード（世界標準）への挑戦である等と如何様にも見てとれるが、実は12世紀という遙か昔にイスラム世界の一地理学者が南北逆さまの地図を描いていたことを知る人は少ない。

アフリカ大陸からヨーロッパ大陸へ

モロッコ北端の港町タンジールから大型フェリーで2時間半（高速船の場合1時間）ほど揺られると、ヨーロッパ大陸の玄関口であるスペインのアルヘシラス港に着いた。褐色や浅黒い肌の色をしたアフリカの人々を見慣れた目には、港で働くヨーロッパ人の肌色や顔つきに「（かつてドイツ留学で慣れ親しんだ）ヨーロッパ世界に来た」という微かな安堵感を得た。だが、大きな荷物を抱えた乗降客でごった返す港の雑踏や、激しく飛び交うアラビア語を耳にした次の瞬間「ここはヨーロッパだけど私の知っているヨーロッパではない！」と悟った。ここはまさにアフリカでもない、ヨーロッパでもない、二つの異文化が交錯・融合する不思議な土地であった。

ジブラルタル

<地理>

総面積：6.5 km²⁶

地勢：イベリア半島南部にある岬の先端部に位置し、石灰岩質のターリク山（通称“*The Rock*”；標高429m）が半島のおよそ半分を占める（図5、写真9）。岩山の急斜面にイギリス海空軍の基地が築かれている。西側の港は自由貿易港としてにぎわい、観光地化もすんでいる（写真10）。

気候：年間を通じて温暖な地中海性気候

政治体制：英国の直轄植民地（自治政府の首相はピーター・カルアナ社会民主党党首）

人口：約27,000人

民族：ジブラルタル（イギリス）人、スペイン人、アラブ人

宗教：キリスト教、ユダヤ教、イスラム教

言語：英語が公用語、市中ではスペイン語も通じる

<略史>

ジブラルタル海峡を隔てて地中海北岸にあるターリク山と南岸セウタ山の2つの山は、ギリシャ時代から「ヘラクレスの柱」と呼ばれ、アトラス神はこの2本の岬を支柱として天を支えていると信じられていた。このようにジブラルタルはギリシャ・ローマ時代から歴

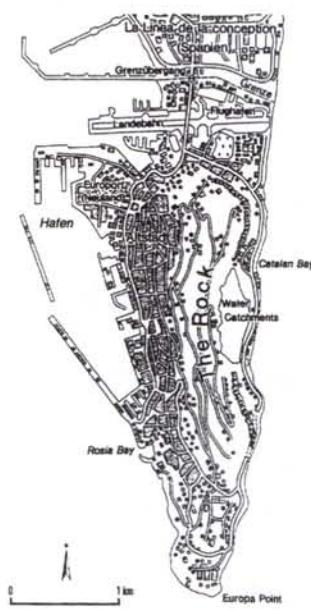


図5 ジブラルタルの岬
Meyer (1998) より



写真9 岬の突端に立つモスクとターリク山（通称“*The Rock*”）



写真10 ターリク山からジブラルタル市内とアルヘシラス湾を臨む
(湾中央に突き出しているのはジブラルタル空港の滑走路)

*香港（約1,100 km²）のおよそ170分の1、シンガポール（約683km²）のおよそ100分の1にあたる。

史に登場し、アフリカとヨーロッパの民族による争奪の地であった。とくに、711年にターリク隊長率いるイスラム勢力がここを占領してからは、1462年までスペインとイスラム教徒のあいだの争奪戦が繰り広げられた。イスラムの隊長ターリクが、この要害を拠点にしてイベリア半島に侵入したことからこの岩山は「ターリクの山」「ジャバル・アル・ターリク」と呼ばれ、それが地名「ジブラルタル」の由来となった。その後1704年にイギリスが占領し、スペイン王位継承戦争の終結した1713年ユトレヒト条約によりイギリス統治が公に認められ今日に至る。以来、イギリスは幾度となく埋め立てによる領土拡張を行い、18世紀初頭にはわずか細長い岬状であったジブラルタルは、今日では岬の西岸に近代的な港湾施設と滑走路が建設され要塞としての機能と体裁を帯びている（図6）。地中海の出入り口にあたることから、両大戦中も重要な軍事基地となり、今日に至るまで軍事的な要衝の地となっている。

＜イギリス政府による英国民定住促進政策＞

英国政府はジブラルタルの人口流出に歯止めをかけるため、ジブラルタルでは金利収入・配当収入などの源泉徴収を実施していない。また、英國本土にジブラルタルの投資収入を持ち込まないという条件付きで所得税を徴収せず、学費・住宅費など様々な点で優遇措置を設けることで人口の定着に努めている。

＜ジブラルタル返還問題＞

スペインは再三イギリスにジブラルタルの主権回復を要求しているが、イギリス政府は返還問題に関する協議に応じるもの、NATOの軍事拠点存続とジブラルタル住民間の反発を理由に返還要求を受け入れていない。一方、スペイン側もモロッコ領内のセウタとメリーリヤに植民地を保有しており、それらの返還問題とジブラルタル問題がリンクしているため交渉が難航している。1967年にはジブラルタルのスペイン返還に関する国連決議が

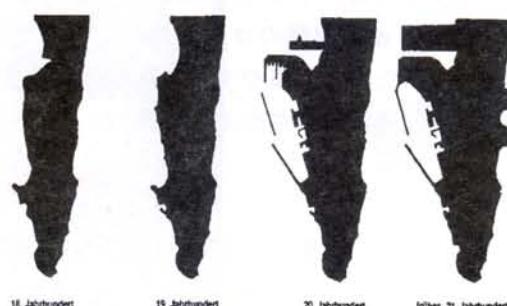


図6 ジブラルタルの領土拡張
(左より18世紀、19世紀、20世紀、21世紀初頭)
Meyer (1998) より

採択されたが、同年に自治政府が実施したジブラルタルの住民投票で住民の9割以上が英國統治を希望した「ねじれ現象」が生じた。2002年7月英國政府は「(スペインとの間で)主権の共有を受け入れる用意がある」と表明したが、同年11月に実施された自治政府による住民投票では再び9割以上がスペインへの返還を拒否した。

スペイン南部アンダルシア地方

アンダルシア地方はスペイン南部にひろがる8県の総称である。青く澄んだ空と白亜の家々、輝く太陽ときらめく紺碧の海、そして何よりも往時をしのぶムスリム様式の建造物の数々がこの地方独特の景観を形づくる。気候は地中海性気候で穀物、オリーブ、ブドウの栽培と闘牛用の牛の放牧が盛んである。さらに、ブドウから醸造する酒精強化ワイン「シェリー酒」生産の中心地となっている。とくにヘレスは世界各地に輸出されている“Tio Pepe”社をはじめシェリー酒の産地として世界的に有名である。

また、アンダルシア地方の地中海沿岸は「コスタ・デル・ソル（太陽の海岸）」「コスタ・デル・ルス（光の海岸）」と呼ばれ近代的なリゾート地として観光客の人気を集めている。

ポルトガルの首都リスボンおよび周辺地域

＜コルク工場見学＞

ワインの栓をはじめ各種建築材として多用されているコルクは、ポルトガル、スペイン、南フランス、北アフリカの地中海沿岸地域にだけ群生するコルク櫟の幹皮である。なかでもポルトガルはコルク製品の生産高世界一を誇り、コルク櫟の栽培や採取、伐採に関しては政府による厳しい管理が行われている。具体的には、コルクの木は植えてから25年間は皮を採取することが認められず、それ以降は9～10年周期で収穫がおこなわれる（写真11）。コルク櫟の育成は、ポルトガルをはじめとする地中海沿岸地域の重要な産業の機能を果たす一方で、夏に厳しい乾燥に見舞われるこれらの地域を砂漠化から守る重要な役割も担っている。首都リスボンの南にひろがるアレンテージョ地方はコルク櫟の宝庫といわれ、ポルトガル国内で有数の広さを持つコルク林が数多く分布している（図7）。人手によって斧で幹から剥がされた厚さ20～50 mm前後のコルクの幹皮はトラックで工場に運ばれる。人手によって等級別に仕分けされたあと、虫やタンニンなどを除去するために高温で煮沸され、平板に加工したのち世界各地に出荷される（写真12）。

＜大航海時代とリスボン＞

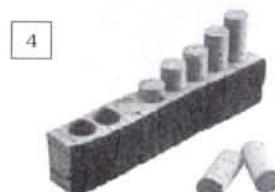
リスボンは、市内を流れるテージョ川の河口に発達した人口約188万人のポルトガルの首都である。リスボン市の南西部にあたるベレン地区には、ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見を記念して建てられた「ジェロニモス修道院」、大航海時代からのさまざまな航海技術や船舶に関して貴重な資料が展示されている「海洋博物館」、1519年にリスボン市の防衛のために建てられた白亜の「ベレンの塔」やエンリケ航海王子の500回忌を記念して建てら



写真11 コルクの収穫



図7 地中海沿岸地域におけるコルク櫟の栽培地域



- 1 コルク工場への搬入
- 2 野積みされるコルク櫟の原料
- 3 圧延された出荷用のコルク
- 4 ワインの栓用にくり抜かれる

写真12 コルクの加工から出荷まで

れた「発見のモニュメント」など、大航海時代の興隆を偲ばせる数々の建造物がみられる。

＜欧州連合の構造基金＞

EUはスペインとポルトガルの加盟以降、域内における経済力・社会基盤の国家間・地域間格差是正を目的とした構造政策（財政支援政策）を1988年から実施している。EUはこの構造基金をもとに、スペイン南部、ポルトガル、イタリア南部、ギリシャ、アイルランドなどいわゆるEU域内の縁辺部（図8）を中心に、港湾、空港、高速道路などの大型イ

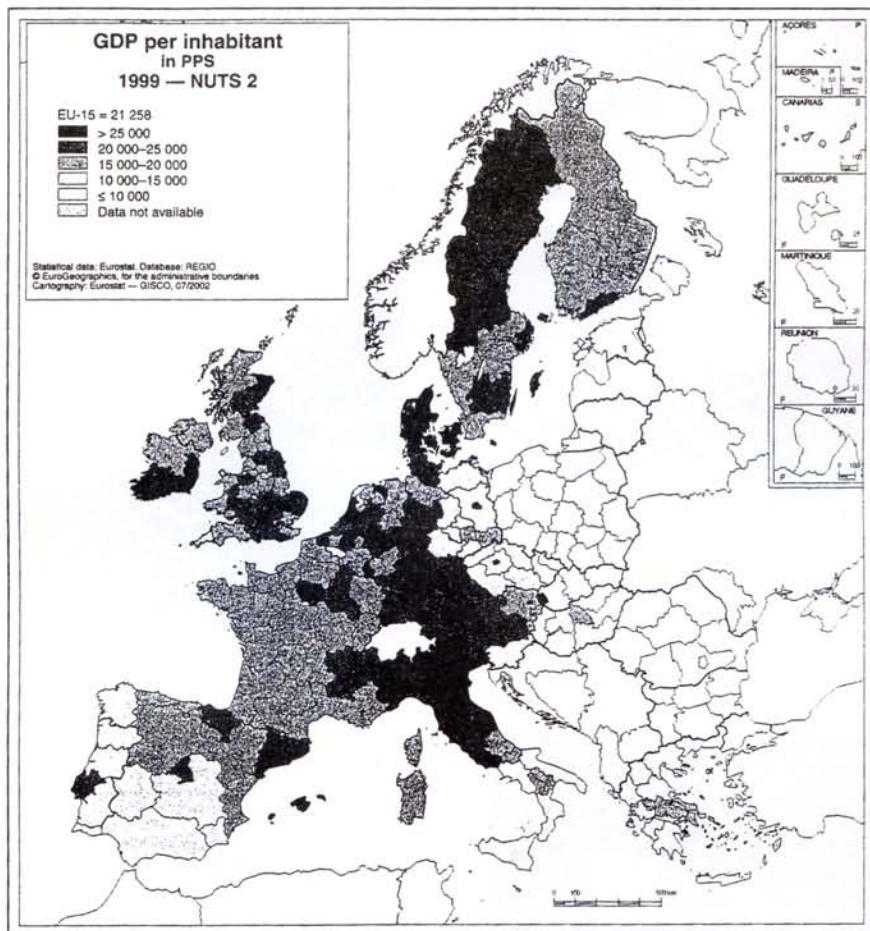


図8 EU（15カ国）域内における国内総生産の地域格差（1999年）Regions: Statistical Yearbook 2002より

¹エンリケ航海王子自らが設計を手がけ、建設は1502年から19世紀にかけて長い年月を費やした。内部にはヴァスコ・ダ・ガマの棺が安置されている。



写真13 EU構造基金からの助成
(左: ヴァスコ・ダ・ガマ大橋、右: リスボン市内の建設現場)

ンフラの整備と雇用機会創出を行うことによって加盟国間・地域間の経済・社会面における格差是正を目指している⁸。研修旅行中にスペインのアンダルシア地方やポルトガル南部をバスで西進する際にも、EUの構造基金によって建設が進められている断続的な高速道路から一般道への迂回が幾度となく行われ、EU域内縁辺部における交通網の整備が進められている様子が伺われた。また、ポルトガルの首都リスボンでは、市内を流れるテージョ川に架かる全長18 kmのヨーロッパ最大の橋「ヴァスコ・ダ・ガマ大橋」をはじめ、リスボン駅の駅舎や市内のあちこちにある建設中の大規模な建物の脇には「EU構造基金による助成を受けている」旨の掲示が見られた(写真13)。

<掲載した図・写真の出典>

- Ehlers, E. 1984. Zur baulichen Entwicklung und Differenzierung der marokkanischen Stadt: Rabat-Marrakech-Meknes. Die Erde, 115, 183–208.
- Meyer, F. 1998. Gibraltar: Vom kolonialen Garnisonstandort zu einem europäischen Finanzzentrum? Geographische Rundschau, 50. pp. 330–336.

⁸この地域政策はEU予算のうち共通農業政策に次いでEU総予算の3分の1を占める主要な支出項目となっている。

写真 6, 写真 7, 写真 8, 写真12 〔3〕は研修旅行に同行した坂口陽子氏より提供.

図 7, 写真11, 写真12 〔4〕は <http://www.amorim.co.jp/index2.html> より借用.

図 8 は Eurostat 2002 (欧州連合統計局発行) より引用.